Kwansei Gakuin University

Economic Criticism について

増　永　俊　一

I. 経済学と文学

「ロビンソン物語にみられる人間類型」

ダニエル・デフォーの『ロビンソン・クルーソー』(1719) は、まずは胸躍る子供向け冒険物語として想起されるが、文学の世界においては、その精緻なリアリズムとロビンソンという個性的人物の造形で、殊に近代小説黎明期の重要な作品と位置づけられている。一方、この物語の持つ意味は多層多重で、実のところ「文学」の世界にはとうてい収まりきらない。

ルソーは、その著書『エミール』の中で「私は書物が嫌いだ。書物は知りもしないことについて語ることを教えるだけだ」(ルソー、324) と言い放ち、教育における書物の弊害を説く。ところが、「どうしても書物が必要だというなら、……自然教育のもっともよくできた概説を提供する一巻の書物が存在する」として、「そのすばらしい本とはどんな本なのか。アリストテレスか、プリニウスか、ビュフォンか。いや、ロビンソン・クルーソーだ」(ルソー、325) と、例外的書物として絶賛する。言うまでもなく、ロビンソンは無人島という一般社会から切り離された状況に置かれているわけだが、その隔絶された無垢の状況下におけるロビンソンの人間的成長に教育の理想のモデルを見ようとしており、教育論にも影響を与えているのである。

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

カール・マルクスが『資本論』で述べているように（マルクス、139）、経済学者もまた『ロビンソン物語』を好むようである。日本におけるその顕著な例は、大塚久雄の『社会科学における人間』であり、特にその一章、＜『ロビンソン物語』に見られる人間類型＞であろう。大塚氏は、「経済学の理論は、……実はロビンソン的人間類型を前提として成立している」（大塚、64）と主張する。デフォーは、1660年に生まれ1731年に没しているが、丁度この十七世紀後半から十八世紀初頭という時期に、イギリスでは大きな社会構造の変化が現れていた。農村地域で毛織物工場を営む中小の生産者たちが生まれ、彼等の登場が後には産業革命を引き起こす原動力となる。彼らを大塚氏は「中産的生産者層」と呼び、勤勉な「中産的生産者層」こそが、ロビンソンの「社会的モデル」（大塚、24）であるというのである。この視点で小説を読み返すと、ロビンソンの父は「この中間の身分が、幸福の真の基準である」(Defoe, 6) と息子を諭し、ロビンソンの人物造形には、新たにイギリスの於いて勃興した中産階級というものが、実際強く意識されている。

大塚氏は、無人島でロビンソンがサバイバルに向けて取った行動を検証し、経済学的概念を以てそれらを解釈し直してゆく。先ず、ロビンソンは難破船で小麦を見つけるが、彼は空腹にまかせてそれを直ぐに食べてしまいはしない。土地を耕作し、その小麦を蒔き、収穫して、一部を種子として取り置き残りを「消費」する。また、島で野生の山羊を発見したときも矢張り直ぐには屠殺せず、牧場を作り、繁殖させた上で、必要に応じて「消費」する。大塚氏は、このロビンソンの行動に、「将来の生活上の必要」（大塚、45）勘案する態度を見、社会的にいえば正しく「需要」の予測だと指摘する。更にロビンソンは、矢張り難破船から運び出した貴重な火薬を、色々なところに分けて保存する。これも、経済学の視点からすれば「危険の分散」であり、言い換えれば「保険」を掛けているという具合だ。（大塚、43）このように、大塚氏は、経済学という視点をもって、ロビンソンこそ実に「すぐれた経営者であり、また同時に忠実な労働者である」（大塚、44）と定義しているのである。これは、つまり、文学テクストの中に描かれる十七世紀人の在り方に経済学の想定するモデルを見ようとする、文学に対する経済学者によるアプローチであると言える。

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

こういった極めて肯定的ロビンソン像に対して、現在では批判がないわけではない。先ずこの読みは、ロビンソン物語が見事にヨーロッパ列強による植民地支配の縮図であり、「道徳的に正当化された帝国主義の物語」(Green, 23) であるという側面を全く考慮しない。また、飽くことなく難破船から資材の搬出を繰り返し、繁栄を志向するロビンソンに、現在の「展望なき現代資本制・大量消費社会の我々の姿」(岩尾、12) を見て取る論者もいて、更に次のように批判する。

> 大塚氏の解釈には、歴史の動的展開を見届けたウェーバーのイロニー、ならびに物語のイデオロギー機能についての認識が欠落し、……「ピューリタニズムの倫理」と「資本主義の精神」のベクトルを同一視して、カルヴァンもデフォーもフランクリンもスミスも整然と一列に並んで行進するところの禁欲的産業資本なるものの形成過程にロビンソンを位置づけ、労働者も会社の社長サンも、それどころかアジアの貧民も、近代化と生産性向上のためにロビンソンの合理主義と勤勉に学ぶべしという結論を出す。
>
> (岩尾、35)

しかし、これら一連の批判は、文学テクストを経済学研究の手段とするその方法論に加えられたものではない。むしろ、それは「封建的残滓を払拭して生産力増強に邁進する近代的人間類型を見出し、これを一面的に肯定」(岩尾、9) するというそのイデオロギーに対するものであって、人文科学である文学と社会科学である経済学の近接性を否定するものではない。そして、むしろ現在の文学批評における新歴史主義の流れは、文芸批評家が経済学の諸概念を導入し、個々の作品解釈に援用することの可能性を従前に増して模索し始めているのである。

「ヴェニスの商人の資本論」

大塚氏の著作に顕著に見られる文学に対する経済学的アプローチは、経済学が学問としての成立し、やはりほぼ同時期に成立した近代的な文学ジャンル、小説の登場する西欧の十八世紀以降にだけ、適用できるものでは必ずしもない。岩井克人の「ヴェニスの商人の資本論」は、シェイクスピアの『ヴェニスの商人』にやはり経済学の諸概念を導入した奔放な読みを展開する。

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

岩井氏は、まず『ヴェニスの商人』の登場人物を3つのグループに腑分けすることから始める。即ち、アントーニオ、バッサーニオ、グラシアーノ、ロレンゾー等ヴェニスのキリスト教徒が形成する共同体を第一のグループとし、第二のグループはシャイロックに代表されるユダヤ人、そしてポーシャ、ネリッサ、ジェシカの三人の女性による第三のグループである。そして、この劇を構成する四つの物語 ── 人肉裁判で頂点を極めるアントーニオとシャイロックとの対立抗争、三つの小箱によるポーシャの婿選びとバッサーニオの求婚、ジェシカとロレンゾーの駆け落ち、ポーシャとバッサーニオとの指輪をめぐる茶番劇── が、何れも三つのグループの間における何らかの意味における「交換」によって生み出されていると指摘する（岩井、8-9）。

先ずは、マックス・ウェーバーに依拠して、アントーニオらが構成する「共同体的社会」が、商品交換による貨幣経済と異なり、人々の間の「兄弟盟約」によって成立している社会であると規定する（岩井、11）。一方で、「商品交換は、共同体の果てるところで、共同体が他の共同体またはその成員と接触する地点で始まる」というマルクスの言を引き、遠隔地交易商人でもあるアントーニオの両義的立場を提示する（岩井、13-15）。そして、アントーニオとシャイロックの対決を、「兄弟盟約的な人間関係によって支配されている共同体内部の精神と、貨幣とモノとの等価交換にのみ支配されている共同体外部における論理との対決」（岩井、26）であると見定めている。シャイロックの口にする「証文通り」というテクストの孕む「等価交換の原則」が、皮肉にも兄弟盟約的共同体を体現するアントーニオを窮地から救い出し、人肉裁判をテクストに潜在する異質な経済体制のせめぎ合いの場として抽出してみせるのである。アントーニオとは、共同体原理に固執し、資本主義的個人として転身できなかった悲劇的人物なのだ。

この論考においてキーワードとなっているのは、「交換」、「貨幣」、「流通」、「利潤」といった経済学の語彙である。そして、それらは大塚氏の使用する「消費」や「需要」といった語彙よりも、更に細分化された経済学的言説である。その中でも特に「交換」は、文学的言説と経済学的言説が交差する場となっている。マーク・

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

シェルは、「文学作品は、小さな転義的交換、乃至は隠喩から成り立っており、そのいくつかは指示される (signified) 経済的内容によって分析することができ、すべては経済的形態によって分析できるもの」であり、「経済学的文学批評 (economic criticism) は、そういった文学的交換と経済学 (political economy) を構成している交換との関係を理解することを求めるもの」と指摘する (Marc Shell, quoted in Woodmansee, 5)。つまり、経済における「交換」と言語の「交換」双方の相同関係 (homology) ないしは相似関係 (analogy) を発見しようとするのが、経済学的文学批評の一つのあり方であるのだ (Woodmansee, 18)。そもそも、隠喩 (metaphor) という語自体が、その語源として転移ないしは交換の概念を含んでおり、全ての隠喩はある意味で経済的である。

一つのあり方という限定をつけるのは、実際には経済学的文学批評は必ずしも一様ではないからである。先述のような言語が本質的に有する転義的 (tropic) 特質と、経済学における「交換」との根源的相同関係に注目するものから、それぞれの作家の金銭的、経済的実践、芸術的労働から得られる利益、市場における位置づけなどを検討するもの、また広告、大衆文化といったテクストに影響を与えている文化的言説を考証するものなど、多岐に亙っている。しかし、何れの経済学的文学批評も、言語と経済それぞれの体系間の平行関係と相似関係の存在とその開示の上に成り立ち、それぞれ逆照射が可能であるとの認識を前提としている点で共通している。

先に言及した二つの論考は、何れも経済学者が各々個別のテクストを考証し、そこに何らかの経済学的モデルを提示するものであった。では、文学批評の場にあっては経済学と文学はどの様に融合するのであろうか。次に、この経済学的文学批評をアメリカ小説に適用した最新の一例として、トラットナー (Michael Tratner) の "A Man is His Bonds: *The Great Gatsby* and Deficit Spending" を以下に訳出した。筆者は、現在ペンシルヴァニア州のブリンマー大学の英文学助教授で、著書には *Modernism and Mass Politics: Woolf, Eliot, Yeats* (Stanford University Press, 1995) がある。訳出した論文は、同じくスタンフォード大学出版局から来年年初に刊行が予定されている *Deficits and Desire: Economics and Sexuality in*

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

*Twentieth-Century Literature*に収められる予定のものである。多少、その論旨の進め方に強引さがあることは否めないが、1920年代アメリカのバブル経済期に人々の間に蔓延した金銭に対する根本的価値観の変化を、『華麗なるギャツビー』に読みとろうとするものである。端的に言えば、それは「消費による欲望の解放」(368)であるが、経済のみならず、宗教や道徳観念の変化をもたらしたものでもあったと指摘し、文化的言説の変容により注目するものである。尚、この翻訳にあたってはトラットナー助教授の快諾を得ているが、訳出の際、一カ所『ギャツビー』テクストからの誤引用が見つかり、その引用に基づく論旨の展開も若干の修正を余儀なくさせるものであった。原著者もこの点を了解し、変更分が送られてきたので、当翻訳はその修正に基づいている。詳細は、訳注として当該箇所に示しておいた。テクストからの誤引用の訂正と共に、そのことをあらかじめお断りしておく。また、訳註は脚註とし、原註は参考文献と共に文末に示した。

＜引用文献＞

Defoe, Daniel. *The Life and Strange Surprising Adventures of Robinson Crusoe of York, Mariner*. 1719. London: J. M. Dent & Sons, 1949.

Green, Martin. *The Robinson Crusoe Story*. University Park: Pennsylvania State UP, 1990.

Tratner, Michael. "A Man is His Bonds: *The Great Gatsby* and Deficit Spending," in *The New Economic Criticism: Studies at the Intersection of Literature and Economics*. Eds. Martha Woodmansee and Mark Osteen. New York: Routledge, 1999. 365-377.

Woodmansee, Martha. "Taking Account of the New Economic Criticism," in *The New Economic Criticism: Studies at the Intersection of Literature and Economics*. Eds. Martha Woodmansee and Mark Osteen. New York: Routledge, 1999. 3-50.

J・J・ルソー『エミール』(上) 今野一雄訳、岩波書店、1994年。

カール・マルクス「商品の物神性とその秘密」、『資本論』(一) 向坂逸郎訳、岩波書店、1969年。

岩井克人『ヴェニスの商人の資本論』筑摩書房、1985年。

岩尾龍太郎『ロビンソンの砦』青土社、1994年。

大塚久雄『社会科学における人間』岩波書店、1977年。

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

II.「人はその債券なり：『華麗なるギャツビー』と赤字消費について」（翻訳）

1920 年代には、平均的消費者の所得配分に目覚ましい変化があった。貯蓄が減少し、借金が増えたのである。第一次世界大戦以前には、平均的アメリカ人は収入の 6.4 パーセントを貯蓄に充てていたが、1925 年までにこれが 3.8 パーセントに下がった（Olney 1991:48）。消費者金融を扱う一人の歴史家は、次のように述べている。「こういった個人の貯蓄率の急激な減少は驚くべきもので、特に 1920 年代以降はむしろ豊かな時代であり、繁栄の時代には普通貯蓄率が下がるのではなく、上がることが期待されるものだ」(同書:49)。

貯蓄に対するこの変化の原因は、人々が分割払いで購入するモノ、特に自動車や冷蔵庫といった主要耐久消費財に注ぎ込む総額が概ね等しく変化したことにあった。同時期に、そういった投資は、平均的収入の 3.7 パーセントから 7.2 パーセントに倍増したのである。一連の数字は大して重要ではないように思えるかもしれないが、人々の態度が目覚ましく変化したことを統計的に明らかにしている。数年のうちに借金をすることが危険なことではなくなり、全く普通のことになったのだ。この経済観念の変化というものは、文学に大いに影響する。消費者の借金が十九世紀の小説でどのように描き出されているか、考えてみればよい。借金をしている登場人物は、必ず災難を招いているのだ。少数の登場人物は、恒常的に借金をしていても実際うまく生き抜いているのだが、そういった人物はたいてい喜劇的、乃至は風刺的人物である。ところが、『華麗なるギャツビー』(F. Scott Fitzgerald, *The Great Gatsby,* 1925) では、語り手と主要登場人物は何れも金銭取引を行い ——彼らは債券を売っているのである——、そのこと自体は人物描写において瑣末なことのようだ。フィッツジェラルドは、自らのお金にまつわる来歴をもとにその作品上で少なからぬブローカーを産み出している [1)]。債券を売るとは、事実上、他人に金貸しになるようそそのかすビジネスであるが、フィッツジェラルドの世界ではまともな職業である。金融の世界で債券売買など些細なことで、注目に値しないかもしれないが、債券というものは 1920 年代アメリカの時代精神においてはひときわ目立つも

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

のであった。政府自体が、戦時中の債券販売に深く関わっていたからである。この作品は、最終場面のギャツビーの屋敷にかかってきた電話で、彼の不法な債券と連邦政府とを結びつけている。電話では政府の調査官がニューヨークからずっと偽造債券をたどって「パーカー」を逮捕したということになっている。ニックがその伝言を受け取り、彼がプロビティ・トラスト社のために売りさばいている債券が、政府の保護下にあるのだということを、改めて実感させるのがそのメッセージなのである。言うまでもなく、ニックは高潔さ (probity) の化身ではない。彼の売る債券が戦時公債 (Liberty Bonds) ほど完全無欠のものではないことを、人は薄々感づいている。1925年の時点では、民間のローンと金貸し業者はまだ胡散臭いものであったが、急速に日常生活のごく当たり前の要素となり始めていた。『ギャツビー』は、この風向きの変化に関わっているのである。

消費者金融は、二つの事情によって1920年代に爆発的に増えた[2)]。自動車の大量生産と、何世紀にもわたってさげすまれてきた金融業を合法化する政府の施策である。ある商業史家が言っているように、1920年代までは、「まともな高利貸しなど存在しなかった。連中は、<法>によってすぐれて立派なビジネスマンに改心するまでは、一人残らず悪だった」(Walter S. Hilborn, quoted in Michelman 1970:152) のである。借金の正当化は経済倫理の急速な変化をもたらし、それは相当な不安を生じさせるものであった。先だって貯蓄をせずにモノが所有できるのだとひとたびわかってしまえば、国民はすっかり道徳性が失ってしまうのではないかと政府は怖れた。借り入れ合法化を批判するある人物は次のように述べている。

> 分割払いによる販売の過ちは、製造業者、広告業者、商売人、消費者に精神的なモノを顧みず、物質的なモノを狂ったように追いかける事態を引き起こしていることである。まるで、酒やギャンブル、その他の悪習にふけるように、分割払いでモノを買うことの中毒に陥っている。分割払い商法は、我らが市民を不誠実で信用できない存在にしつつあるのだ。アメリカを産み出した質素倹約、産業、信頼性は急速に廃れつつある。国民は、軽率さと犯罪とを分けている薄いベールがあることを見失っている。「分割払い」(“easy terms”) で自動車を販売することは、現在の国家道徳の深刻な状態に部分的に責任があると私は確信している。(Roger Babson, quoted in Michelman 1970:211)

軽率さと犯罪の差異と同一性はこの小説においては中核となるものであり、幾度と

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

なく自動車となく結びつけられている。デイジー、トム・ブキャナン、ジョーダン・ベイカーは皆「軽率」と描写され、三人とも同じような自動車事故に巻き込まれている。ジョーダンもニックを軽率だと言い、自動車事故こそ起こさなかったものの、その名前 ──キャラウェイ (Carraway)── には、あながちその非難が的はずれではない響きがある。作品は、こういった人物の道徳性に読者の関心をひたすら向けさせ、その結果読者は登場人物についてとりわけ複雑な印象を持つことになる。ニックがトムとデイジーについて行う人物判断は彼らが軽率であるということだが、この見立ては、マートル・ウィルソンを轢き殺した車を運転していたのが実はデイジーであるという事実を明かさないという、ニックの決断と表裏一体のようだ。あたかもデイジーは、刑法上責められるところが無いかのようである。こういった軽率な人々と対照的なのがマイヤー・ウルフシェイムだが、彼は紛れもない犯罪者である。ウルフシェイムは、いかさまゴルフなど些細なことで、ワールド・シリーズの買収工作をしている。自動車事故で人をはねるどころか、人を他人に殺害させ、カフスボタンには人間の臼歯を模したものをつけている。ウルフシェイムをやくざなユダヤ人に仕立て上げることで、フィッツジェラルドはシャイロックという古くからあるステレオタイプを持ち出し、まるで金貸し業が全てウルフシェイムの犯すの犯罪の根底にあるかのようである。ギャツビーは、ビジネス・パートナーをウルフシェイムの世界の人間からデイジーの世界の人間に変えようとしており、犯罪と軽率さを隔てる一線、つまり高利貸しと金融会社とを隔てている一線を越える道を模索しているのである。

別な表現をすれば、ギャツビーは非合法債券から合法債券に乗り換えようとしていると言えよう。小説では、この語呂合わせが極めて直截な形で作用している。デイジーは理想的な結婚相手であり、且つある種の冨の表象である。デイジーはいつも真っ白な服を着ていて、さらにギャツビーにとって最も重要な彼女の特質は、「見込み」(promise) と「お金が一杯」と描写されるその声なのである (Fitzgerald,[1925] 1992:120)。二人がキスを交わす時、彼の「夢想」は「儚い吐息」と一体となり、「夢の具象化は完璧であった」(112) のだ。具象化し、彼の夢を現実のものとするもの

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

とは、「お金が一杯」のあの吐息であり、それはギャツビーがウルフシェイムとの関係で得るものとは異なる。デイジーは、清潔で白く、まともなお金を保証しているのである。

まともなお金の保証を得るために、ギャツビーは非合法の世界に足を踏み入れ、お金と身分の両方を借り入れている。彼の借り入れ行為には、至る所に危険があって、マートルを轢き殺した自動車事故の責任を誤って負わされたために、物語は彼の死でもって終わる。実際に事故を起こしたデイジーが裁きを免れたのは、彼女が軽率な富裕層の一員であるからであるとするならば、この本は人々に金持ちとの関わり合いの危険について警告し、読者に用心せよ、ギャツビーを真似るなと警告しているかのように思えるかもしれない。しかし、責任はギャツビーよりも、ギャツビーを排除してきた富裕層により重くのしかかっている。この作品は、非合法の世界に足を踏み入れることなく、また金持ちの強引な行動によって身を危うくすることなく、ギャツビーがその夢を実現し、デイジーとの愛を成就させる方策を何とか思い描こうとしているようだ。言い換えれば、フィッツジェラルドは、貧しい人々に求められている用心深さ (carefulness) を緩和し、金持ちが国家の規範となるべく、その軽率さ (carelessness) をいくらかは容認する何らかの道を模索しているのだ。しかし、それには軽率さに付き物の暴力と腐敗があってはならない。

フィッツジェラルドは、おそるおそるではあったが、1920年代に起こった経済変動に関わっている。当時は、新たな形の軽率さ ——借金と消費—— が、富に至るよりよい道であると貯蓄よりも奨励されていた。『ギャツビー』と同年に出版されたほかの文学作品を引用するとすれば、セオドア・ドライサーの小説『金融業者』(Theodore Dreiser, *The Financier,* 1925) がある。「貯蓄で金持ちになれるなどとは、彼の考えるところではなかった……最初から彼は、盛大に消費することが良いことだという思いを抱いていたのである」(Dreiser [1925] 1961:19) 。消費は、道徳的にも良いことになった。同時代から、経済学者のサイモン・パッテンの言葉を引用してみよう。「非貯蓄者は、今や貯蓄者よりも優れたタイプである。……私は、学生に有り金をすべて消費し、もっと借りて、またさらにそれを消費するように言っている。

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

節約をし、貯蓄に励むなど馬鹿げている」(quoted in Rodgers 1978: 120)。パッテンは少々過激かもしれないが、貯めるより使えという彼のアドバイスは、二十世紀初頭の様々な経済評論家の中でも、典型的なものであった。1909 年には、ジョン・ホブソンが「高く賞賛されてきた節約、倹約、貯蓄は、産業に蔓延する病弊の主因であった」(Hobson [1909] 1974: ix) と公言した。ジョン・メイナード・ケインズは、そういった主張を経済学説に盛り込み、『一般理論』の中で「富の成長は、一般に仮定されているように富裕層の節約によるのではなく、節約によってはむしろ妨げられるのである」(Keynes 1936: 373) と書いている。もし、国民と国家がお金を手にしようとするのであれば、国民は消費によってその欲望を解放する必要がある。

ギャツビーは、そういった経済理論を地で行こうとしている。デイジーの「お金が一杯」の声を勝ち取るために、彼はひたすら気前よく消費するのである。愛する二人のもっとも感情の高まる瞬間を見れば、消費がデイジーの心において鍵となっていることが明らかだ。デイジーは感情が昂って、たった一度だけギャツビーの寝室で涙を流すが、それは、ギャツビーがベッドの上一面に彼の何十着というシャツを放り投げた時のことである。「突然、感極まった声を上げ、デイジーはシャツの山に頭を埋め、激しく泣き始めた。『なんて、きれいなシャツでしょう。』彼女はむせび泣き、その声は重なるシャツの中でくぐもっていた。『わたし、悲しくなってしまう、これまで、こんなに——こんなにきれいなシャツを見たことがないんだもの』」(Fitzgerald, [1925] 1992: 98)。

かつての恋人のベッドで泣いている彼女という状況において、読者は彼女の言葉をシャツとは殆ど関係が無いものと受け取るだろうが、デイジーの感情の抑制を打ち破ったものが、まさしく美しいシャツにギャツビーが大金を投じてきたということであることは確かだろう。賞賛されているのは、彼の趣味の良さではない。シャツを放り投げ始める前に、いみじくも彼はこう言っているのである。『イギリスに私のために服を買う人間を雇っているのです。春と秋のシーズン初めに、服を選んで送ってくるのです』(97)。このシャツは、魅力的であろうとして大金を浪費するこ

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

とを表現している。ギャツビーの身の丈に見て取れるより、はるかに途方もない消費なのである。彼の屋敷も巨大なシャツのクローゼットも、ひたすらデイジーの心を引きつけるために存在している。彼は、途方もない消費によって、相手の心を引き寄せることを達成するのである。おそらく、幾つかの非常に高価な贈り物によっても表現されるだろうが、寝室の場面で見て取れるのは、ギャツビーのデイジーに対する大いなる欲望である。しかし、それはトム・ブキャナンがデイジーを口説いたやり口で、ギャツビーのやり方ではない。ギャツビーのパーティーは、「金が入ってくる見込み」(“promise of money”) によって刺激され産み出される、一般的な消費志向を象徴しているのである。もし金持ちのために取り分けられているような金を引き寄せることが出来ると信じるのであれば、人々は消費するであろう。仮にデイジーが「金が入ってくる見込み」を体現しているとすれば、ギャツビーは巨大な欲望を体現している。実際、ギャツビーの金にまつわる変遷は、あぶく銭を保証したサイクルを演じてみせる。抑制されてきた欲望が、手軽な非合法すれすれの信用貨幣によって解き放たれるのだ（ギャツビーの場合には、文字通り不正債券である)。その解き放たれた欲望とは、「有効需要」(“effective demand”) であり、消費である。それは、合法的な貨幣 ——象徴的にはデイジーだが—— を産み出すために、全経済システムを刺激するものなのである。非合法の貨幣を消費するということは、クレジットで消費することが抵当に入れずに収益を得る一つの手段であるように、合法的な貨幣の世界に近づくための一つの手法であるのだ。

消費を推奨した経済学者たちは、富裕層に更に消費を促すだけでは問題は解決しないとした。金を使うもっと多くの人々の存在が、必要とされていた。大衆の欲望も、また解放される必要があったのである。ギャツビーも、この目標を象徴している。まず、彼はお金とは無縁の世界で育ってきて、彼の主催する盛大なパーティーで以て、あらゆる階層の人々が、消費の世界に入る道を拓いたのである。ニックは、このパーティーを「遊園地」(45) に喩えている。遊園地とは、数ドルの金で誰もが荒唐無稽な夢に浸れる場である。ギャツビーのパーティーは、全くお金の浪費のように見えるが、1920年代の景気を持続させようとケインズらの経済学者によって必

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

要と見做されている「浪費」そのものである。大恐慌の時期に、もし政府が「地面に穴を掘ること」であれ何であれ、お金を使うことになれば、二十年代の景気を回復できるとケインズは記した。勿論、もっと「壮大な」プロジェクトも推奨している (Keynes 1936: 221)。ギャツビーの大邸宅と、パーティーと、シャツは、壮大な不要不急のプロジェクトであり、その効果はまさしくケインズが求めていたものである。それらのものは、関与する全ての人々を刺激し、需要を喚起している。ギャツビーは大量のモノを人にくれてやるが、パーティーの成果は、人々の物欲を更に刺激するということである。クレジット同様、パーティーは、富裕層の快楽に耽るお手軽な手段を貸し付けているのだ。ギャツビーの屋敷と更に類似するものは、おそらく百貨店であろう。百貨店は、遊園地と同じく世紀の変わり目に出現し、全ての階層の人々に壮大で豪華な環境を提供することになった。プロのバイヤーが買い付けた美しい大量のシャツを見てデイジーが抱く恍惚感とは、言うまでもなく百貨店が産み出そうとしている重要な情動なのである。

百貨店と遊園地は、経済システムの新たなイメージの構築に寄与した。富を定義する重要な指標として生産と欠乏に注目することに代わって、消費擁護の経済理論は、ただ配給され流通させることだけが求められる、有価商品の巨大な蓄え (reservoir) という普遍的な充足を打ち立てた。当時のアメリカが直面していた経済問題は、数少ないシャツを奪い合ったり、シャツの製造法について口論する一群の人々であるよりも、実際山ほどきれいなシャツがありながら、客は一人もいないという百貨店という姿 ——過小消費 (underconsumption)—— で現れた。

過小消費の理論家は、豊富な商品の蓄えが自由に流れることを阻害するものが存在していると主張し、その阻害を引き起こしている犯人は、まさしく貯蓄と倹約であるとした。もし、しまい込むより外に出し、引き締めるよりゆるめれば、人々はもっと多くのものを手にすることになる。この理論はあらゆる新聞のビジネス面を賑わすことになったが、そこでお馴染みのメタファーは、経済システムを自動車に喩えるもので、労働によって組み立てるものではなく、人間が様々なアクセルとブレーキによって動かし続ける強力なエンジンというものであった。富を放出する行

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

為とは、従って労働といった厄介な行為ではなく、強力なエンジンを制御するという些細な行為である。国民は、経済の車輪を動かし続ける檻の中のリスではなく、ビロードの座席に身を沈め、リスの檻の中で出来たことよりもさらに早く動かすために、何らかのレバーとボタンを押すだけでよい。富は、どこか外から現れたりはしない――それは、まさにシステムの中に存在するのである。

人々がしまい込むより財布の紐をゆるめ、豊かさを手にするとして、願えば手の届く豊かさというイメージは、経済の考え方だけではなく二十世紀初頭の宗教的、医学的思想にも広がっていった。ダニエル・ロジャーズ(1978)は、1850年から1920年のアメリカにおける勤労倫理が「消費倫理」へと変貌していった様を考察しているが、世紀の変わり目における豊かさというイメージの普遍性を指摘し、一連のイメージが新しい道徳形態と密接につながっているものとして見ている。「本能と力のおもむくまま、意志という留め金をはずし、人生の扉を開くように勧められて、宗教と心理学にこっそり忍び込んだ豊かさというメタファーは、……根源的に倫理の基礎を揺るがした」(122)。ロジャーズは、ラルフ・ウォールド・トラインのような宗教家を引き合いに出しているが、トラインは、「豊かさは天地万物のおきてであります。……やってくるのを妨げるものがなければ、全ての必要に豊かに報いてくれるものなのです」と書き記した(110)。こういった理屈においては、神の恵み(grace)というとてつもなく大きな蓄えは、天国の慈悲深さを自分の手元から広めることを知っている人々の上に降り注ぐのを待っている。人は、勤勉に働く必要はなく、あらゆる価値あるものを得ようとしたい放題にすることを我慢する必要もない。ロジャーズによれば、勤労倫理の変化が最後にもたらしたのは、「自制、自己否定、服従、貞節」からの脱却である(121)。

貞節からの脱却というロジャーズの考え方は、経済と宗教における心的態度の変化と平行する、性に対する態度の変化にも注目する。二十世紀の性科学において、性行動は消費同様消耗させるものではなく、個人を増進させる力を秘めるものとなった(Birken 1988: 37)。ウィルヘルム・ライヒ[i)]とフィッツジェラルドの直接的な影

i)　Wilhelm Reich(1897-1957)は、米国に亡命したオーストリア生まれの精神分析学者。フロイトの精

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

響関係を見出そうとするつもりはないが、ライヒ (1978) の諸理論は、『ギャツビー』の特定の場面と奇妙に符合する。ライヒとフィッツジェラルドのテクストが接近するのは、両者共に、二十世紀初頭の人間と社会における価値とエネルギーの源を探る一連の見解から導き出されているからだ。その諸見解とは、欠乏の経済学と欠乏の性衝動が、放出する、「消費する」、あるいは社会と個人というエンジンのアクセルをふかすとでも言えるものに、経済学と性衝動が変化したことを示すものであった。

ライヒは、性衝動の消費者理論を展開し、その理論では快楽は文字通り「生物体系における生産的過程」となる (Reich 1961: 260)。快楽は、神々しいまでのエネルギーを発散する。ライヒはそれを「宇宙的」、あるいは「オルゴン」(orgone) エネルギーと称し、それに精神的、肉体的健康を保つものがあると信じている。ライヒは、「生物体は、全ての細胞の中にオルゴン・エネルギーを蓄えていて、呼吸という過程によって、大気からオルゴンを充電し続けている」と説明している。オルゴン・エネルギーは、セックスの快感、オルガスムによってのみ、使用可能となる。ライヒとフィッツジェラルドのそれぞれの人生における重要事項とは、こういった次第で、「個人がその生体エネルギーを処理する手法。エネルギーをどの程度貯め込み、どの程度絶頂のうちに放出するかということ」である（同箇所)。

『ギャツビー』の中で、ライヒの言葉に極めて近いように思える一つの句は、ジェイ・ギャツビーが、「絶頂の未来」(orgastic future) を追い求めていたという表現である（Fitzgerald [1925] 1992: 189）。エドマンド・ウィルスン[ii)]が、フィッツジェラルドの死後出版された版で、この句を「狂騒の未来」(orgiastic future) に変更し、それによって肝心なところを絶頂からお祭り騒ぎに変えてしまっている[3)]。ギャツビーのお祭り騒ぎ、パーティーは、単にデイジーを彼のもとに引き寄せる手段としてのみ機能しているわけだから、ウィルスンの修正は間違いであろう。お祭

神分析とマルクス主義的な社会批判とを統合し、性を肯定する独自の理論を展開した。後にオルゴン (生命エネルギー) を研究。「オルゴンエネルギー蓄積器」というものを売り出したことが米国の食品医薬法に触れ、1955 年には投獄されている。

ii) Edmund Wilson(1895-1972) は、米国の文芸批評家でシンボリズムの伝統を辿った *Axel's Castle*(1931) で著名である。フィッツジェラルドとは、プリンストン大学で同窓であった。

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

り騒ぎは、唯一の完璧な人間関係に向けての序曲に過ぎない。ギャツビーは、彼とデイジーが社会的規範によって堰き止められたダムを打ち壊すことができさえすれば、二人は壮大な爆発のうちに結びつき、壮大なオルガスムという一瞬のうちに、二人の中にある本能的なエネルギーを放出すると確信している。ギャツビーがデイジーにキスをしたときの「そして彼の言葉にならない夢が彼女の儚い吐息と永遠に結ばれ」、「夢の具象化は完璧であった」(117) という描写において、小説はこの完璧な放出の結末を予感させている。ギャツビーは、人間と神とを隔てている障壁が取り壊される「絶頂の」瞬間を夢見ているのだ。彼とデイジーの肉体が重なり合うとき、この性的な結びつきは、ライヒの語彙を使えば「宇宙的」力を放出し、アメリカの夢を具現化するのである。

もう一つライヒ的なイメージが小説の冒頭に出てくるが、大気から健康を得、クレジットの神秘を学び、文学作品を書くという諸概念が奇妙な形で結びつけられている。

> ひとつには、読むべきものが沢山あり、若々しい呼吸をもたらす大気から引き出されて、溢れるような健康があった。僕は、銀行業務やクレジット、そして投資信託に関する書物を大量に買い込んだが、まるで造幣局のできたてほやほやの貨幣のように、赤や金色に輝いて並び、ミダスとモルガンとマエケナス[iii]だけが知っている、きらきらと輝く秘密を解き明かしてくれそうだった。更に僕には、その他にも沢山の本を読むという高い志があった。大学時代、僕はどちらかというと文学的で、ある年などは『イェール・ニューズ』に格調高く正真正銘の論説を書いていて、そういうことを今、自分の生活の中に再び取り戻そうとしていたのだ。(同書：8)

ライヒの理論において、大気から健康を得るという手法は、各々の抑圧されている部分を堰き止めている内なるダムを破壊するということであった。この引用箇所では、クレジットについての書物が同様の機能を果たし、まるで大気中からお金を引き出すかのように、人が富を得ることを可能としている[iv]。きらきらと輝く秘密を

---

iii) Midas:ギリシャ神話に登場するプリギュアの王。手に触れるものが全て黄金に変わった。
J. P. Morgan(1837-1913):アメリカの大富豪。モルガン商会を興し、鉄鋼トラスト・鉄道・海運・鉱業・通信・銀行などに広範な支配網を確立した。
Cilinius Maecenas(?70-8 B.C.):古代ローマの政治家。文学・芸術のパトロンとして、HoraceやVirgilなどを後援した。

iv) 正しくは『ギャツビー』からの引用文は"new money from the mint"(「造幣局のできたてほやほや

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

解き明かすという保証には性的な意味合いがなさそうであるが、小説の別の箇所から、ニックが発見するものが、経済の秘密というよりもむしろ富裕層の性的な秘密であることが明らかとなる。更に引用箇所の少しあとで、「銀の胡椒」をまき散らしたかのような星空を見上げて、「頭上にある天空の内、どれだけが自分の取り分かを見定めようとして」(25) ギャツビーが姿を現す。ギャツビーは、経済的であり性的でもある「絶頂の未来」の探求によって、天上にある豊かさを引き下ろす術を知っているかのようだ。ギャツビーの風変わりな振る舞いは、ウィルヘルム・ライヒや過小消費論者といった著述家による、堰き止められた経済的、性的エネルギーの解放促進理論と、見事にしっくりと合致するのである。

しかし、ギャツビーは、最終的にはライヒ的でも過小消費論者でもない。彼が追い求めた絶頂の未来と経済学は「新しい」ものではなく、極めて十九世紀的なものなのである。確かに、ギャツビーはお金を吸い寄せるために消費し、性を束縛する幾つかのルールを破るのにやぶさかではないようだ。しかし、既婚の女性を誘惑しようとしてはいても、彼が求めているものは、彼女と結婚し、さらには、とにかく彼女にその処女性を取り戻させるという旧来の十九世紀的理想の回復なのである。そうすることでギャツビーは、デイジーが愛するたった一人の人間となるのである。ライヒは、潜在する絶頂の完全な解放とは、「一人の相手」(Reich 1961: 132) に人が縛り付けられるものではないと言っている。だが、ギャツビーはそういう結論を受け入れることはないだろう。彼は、完全所有という十九世紀のモラルにしがみつき、彼の取る数々の行動が前提とする新しい性認識と新しい経済学を理解し損なっている。ギャツビーは、「旧貨幣」であるトム・ブキャナンからデイジーを取り戻そうとするが、彼女を所有するために、彼はトムが彼女を所有しているのと全く同

の貨幣」) (8) であって、トラットナーのオリジナルにある"new money from the mind"は誤引用だ。それに立脚して"In this passage, books on credit promise to perform a similar function, to release hidden parts of the mind (new money from the mind) that will allow one to acquire wealth as if one were pulling it from the air"(371) という論旨が展開されていたが、当翻訳は、その後筆者から送られてきた" In this passage, books on credit promise to perform a similar function, allowing one to acquire wealth as if one were pulling it from the air"という修正に基づいている。

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

じやり方で取り戻そうとするのである。ギャツビーの消費には、新しい経済学のイメージがあるが、その個人的道徳観念はそうではない。たとえば、お客に果てしなく酒を振る舞うが、彼自身は口にしないことを思い出しても良い。彼は、デイジーをトムのもとから引き離し、完全に彼女を所有したときの「絶頂の未来」を夢見る、自己抑制の利いた節度ある人物なのだ。ギャツビーは、借り手にも貸し手にもなろうとはしない。彼は、一人の所有者になりたいのであって、おそらく一人の革命家になりたいのである。彼は、「旧来の」家族から全ての価値を取り去り、そしてその価値を全て自分で所有したいのである。

ギャツビーの十九世紀的モラルは、若いときに自らに課した人に抜きん出るために人生の全時間を計画づくめにするという、ベンジャミン・フランクリン流のその規律にも現れている。この小説は、今となってはそういった自己規律が役に立たないものであることをことさら強調して終わる。ある種の肉体鍛錬を信奉している点で、彼はトム・ブキャナンとよく似ている。しかし、肉体鍛錬では、もはや健康はもたらされない。既に身体的にも、立志伝中の人物 (self-made man) には成れないのだ。トムの「頑強な肉体的エゴイズムでは、もはや彼の横柄な心を満たすことはない」(Fitzgerald [1925] 1992:25) のである。トムは、エゴイズムでは手に入らなくなった滋養物を、ついには性欲に求めることになる。彼は、マートル・ウィルソンと関係ができるが、それは彼女が彼に欠けている一つのもの、「直ぐにそれとわかる活力」(30) を持っていたからだ。この作品は、性的関係にこの「活力」を求めること、また一個の身体的自己となり、一個の身体を持とうとして、ある種のエネルギー貯蔵庫の口を開こうとすることを描き出している。ギャツビーは、彼の夢を具現化する「身体」を提供するものとしてデイジーを求めているのだ。しかし、ギャツビーは、彼女を手にすれば自ら所有するものなるだろうと思い、デイジーが供給するものを勘違いしている。この小説では、欠乏の経済学においてそうであるように、自己充足は既に可能でも、力強さのモデルでもない。むしろ、それは弱さのモデルとなり、人も、企業も、政府も金の借り方を知るときに、強く豊かになるので

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

ある。ヴァン・ワイク・ブルックス[v]が1920年代に書いたように、「経済的誇示は、概ね悪しき時代錯誤」(quoted in Rogers 1978: 121) であるのだ。人は自分専用の銀行口座や身体を築き上げるのではない。口座も身体も、他者からの「活力」を必要としているのである。

ある面白い例が、ここで危うくなっていることを説明するのに役立つかもしれない。ニックは、「何であれ完璧な自己充足を見せつけられると、僕は度肝を抜かれて賞賛の言葉を口にする」(13) と言う。このような誇示は全く稀なことであって、事実幻想に過ぎない。彼のこの科白は、うまい具合にバランスを取りながら座っているので、まるで「係留された気球に乗っかっている」(12) ように見えるジョーダン・ベイカーを描写したときのものである。自己充足に残されているのは、この空中でバランスを取るイメージである。立志伝中の人物 (self-made person) とは、勝手に膨らんでいる気球 (self-inflated balloon) と変わらない。

この小説は、自己所有の理想から部分的所有、共同所有の世界への変化を記している。ギャツビーがデイジーに完全に「自分のもの」になることを求めていなければ、二人は結ばれていただろう。デイジーは愛する男が二人いる世界に生きることを願っているが、ギャツビーはそうではない。小説は結局ギャツビーから離れ、万人にささやかな快楽を与える世界という別のシステムに移行する。現在あるシステムを破壊し、今お金（或いは快楽）を持っている人々から、それを根こそぎ巻き上げる「完璧な」オルガスムは不要なのだ。この変化は、ニック・キャラウェイの人間関係に暗示されている。ニックは、疎遠であったデイジーの又従兄弟にあたり、デイジーと人間関係を築くために結婚する必要はない。彼は、デイジーの友人と気楽なセックスをし、自分の家をデイジーとギャツビーの逢い引きのために貸す。彼は、ギャツビーの奔放な快楽を単に借りただけであるから、そのことに対し、しっかり支払いをしなければならないということはない。この小説は、富裕層の快楽をどのように借りたらよいのか、その方法を読者に良く示している。ギャツビーとのつき

---

v) Van Wyck Brooks(1886-1963): アメリカの文芸批評家。The Flowering of New England (1936) で、ピュリツァー賞を受賞している。

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

合いよりも、ニックとのつき合いに投資することで、低い貸付利率 (a lower interest rate) を得るのである。ニックはギャツビーよりも随分と面白味にかける (much less interesting) 人物だが、彼の言葉と彼の債券は遙かに手にしやすい。ニックにくっついていれば、冨の世界に安全に近づける。ニックは、我々のエンジンを制御不能にすることなく、小気味よく動かし続けるアクセルとブレーキの使い方を知っているから、冨への衝動を抑圧する必要はない。もし、ギャツビーが経済的にも性的にも制御不能となった車だとすれば、ニックには対照的に「考えるに遅く、自分の欲望にブレーキをかける内奥の規則が山ほど」(63-64) あるのである。これは、ヴィクトリア朝時代の道徳めいているが、彼のブレーキは欲望や衝動を抑えてはしまわない。ただ、欲望や衝動の速度をゆるめるのである。

ニックは、ジョーダン・ベイカーとのつき合いが始まった場面で、欲望のブレーキについて語っている。この情事に彼が足を踏み入れる様子は、慎重な運転とも言える、衝動を抑えて使用することの好例だ。二人の話題の中心は、コントロールの利かない行動ということある。二人は、軽率さということについて話し合っているが、ジョーダンは、軽率な人間が危険にさらされるのは、別の軽率な人間と出会ったときだけだという自説を披露している。ニックの内なるブレーキに絡む下りは、彼が軽率ではないということ、それで、ジョーダンは、彼のいるところでは気兼ねなく軽率に振る舞えるのだということを暗示するものである。ニックの「ブレーキ」とは、彼と関わりを持つ人々が軽率であることを可能にしているのである。それは、債券のセールスマンにとって、他人が無頓着にも自分から金を借りてくれるのが、徹底して清廉潔白であるという評判を取るかどうかにかかっているのと似ている。後にニックがジョーダンと別れるとき、彼女はニックが軽率で、自分が傷つくという失敗をしでかしたと言っている。しかし、二人の関係において彼が取った行動は、すっかり細心さに欠けるというものでも、格別気遣いがあるというものでも無かった。彼は、目一杯彼女を気にかけるでなく、全く気にも留めなかった訳でも無かった。ニックは、不一注意 (care-less) ではあったが、多少の注意力はあったのである。彼の情事は抑制された放縦であり、利息の大してつかない投資であり、ささやかな

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

快楽で利益を支払ってくれるものなのだ。ニックは、過剰に過ぎる需要の爆発を引き起こすことなく、効果的な需要喚起の術を知っている人間なのである。性については、危険な密通や結婚に至るような感情の爆発を伴わず欲望を満たすことが出来る。経済においては、インフレーションか革命に至るしかない過剰な需要と言える、全てを所有しようとする爆発的な欲望を刺激すること無しに、消費する欲望を満たすことが出来る。あるいは金を貸し付けるという行為によって、他人の欲望を満たす手助けが出来るのである。

この小説には、革命的な思想を示唆するものがいくつかある。少なくとも一人の批評家が、フィッツジェラルドは、事実マルクス理論を提示していると主張している (Posnock 1984: 201-14)。そこまで言い切るつもりはないが、富裕層から貧困層へ、インサイダーからアウトサイダーへ、アングロ・サクソンの支配するアメリカの旧貨幣（トム・ブキャナン）から人種の異なる「成り上がり者 (arriviste)」（ジェイ・ギャッツ）へと完全に富を譲渡するという夢は、この作品の片隅に漂っている革命的な目標なのである。革命の危機は、1925 年のアメリカにおいては真実味を帯びていた。ロシア革命から八年、1919 年の「赤の恐怖」から六年しか経っておらず、何百人にも上る移民が、共産革命を扇動したということで国外退去させられた[4)]。1920 年代には、移民が国を乗っ取るのではないかという怖れが非常に強く、タマニー派のボス連中[vi)]、ギャング、革命論者に対する懸念とが渾然一体となり、その見分けがつかなかった。移民の流れ、特にユダヤ系移民の流入を制限しようとする一連の法案が、可決された。名前を変え、非合法のユダヤ人コネクションによって勢力を伸ばすギャツビーとは、そういった様々な不安を 1920 年代の読者の脳裏に容易に浮かび上がらせるものであったのだ。名前に外国風の響きがある一人の貧しい少年が、一体どうやってアメリカの夢に乗れるというのか？犯罪に走らなけれ

vi) The Society of St. Tammany はもともと 1786 年に創立された慈善団体であるが、後にその性格を変え、庶民の社会的不満を吸い上げ、1860 年頃にはアメリカで最も勢力を有する民主党の圧力団体となった。『ギャツビー』の時代である 1920 年代においては、ニューヨーク市長 Charles Murphy のもと、圧倒的な政治力を誇り、腐敗、醜聞が絶えなかった。ニューディール政策の実行によって、その影響力は次第に衰えていった。

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

ばならないのではないか？それとも、革命か？

さらに、社会主義に対する恐怖心と自動車の間には、興味深い関係がある。1906年にウッドロー・ウィルソン大統領は、こう語っている。「自動車ほど、この国に社会主義的な感情を広めているものはない……富の傲慢さの象徴だ」(quoted in Michelman 1970: 240)。合衆国が社会主義革命を逃れる一つの手段は、誰でも気軽にクレジットで手に入る安価な自動車を提供することであった。その結果、自動車はもはや富の指標ではなくなったのである。この小説は、自動車と富の誇示、そして労働者階級の怒りという問題を提示している。ウィルソンという名のガソリンスタンド従業員（フィッツジェラルドは、大統領のことを仄めかしているのではないだろうが、それにしても奇妙な符合である）は、トム・ブキャナンの自動車を修理し、再び売って金儲けをしようと何度となく買い取りを迫る。だが、労働者たちに彼の富から利益を得させるどころか、トムは彼ら労働者を利用している。トムとマートル・ウィルソンとの不倫は、夫ウィルソンを怒らせるが、それは利用された挙句灰の谷[vii)]に捨てられてしまう労働者たちの怒りなのである。更に、トムの妻デイジーはマートルを轢き殺し、ウィルソンのくすぶる怒りは暴力的行動へと駆り立てられ、トムはその暴力的行為を誤ってギャツビーへと向けさせてしまう。労働者階級のウィルソンの怒りが、富裕なブキャナン家の人々に利用されて、成り上がりで派手なギャツビーへと向けられてしまうのには、トムとデイジーによって奇妙にも偶然演じられてしまう事情の重なり合いが介在している。このように、この小説は、1920年代に国中に充満していた労働者階級の不満に応えるものとなっているのである。作品は、紛れもない富裕層であるブキャナン家の冷酷さについて批判はするが、ブキャナン家からお金（つまりデイジー）を奪おうとする成り上がり者のギャツビーの方を殺してしまう。1920年代のアメリカには、富裕層の冷酷さに対して批判はあったが、それが社会主義へとは結びつかなかった。その代わりに、富裕層の行動様式自体が変化することは殆んどなく、限定的で、抑えられた富の移譲である福祉へと向かった

vii) Ash Valley: 小説に出てくるウィルソン夫婦の家がある場所。ギャツビーが住まうロングアイランドは、富裕層の暮らす高級住宅地であるが、そこからニューヨークへ向かう丁度中間に位置して、対照的に全てが灰色に薄汚れた貧困層の暮らす地域とされている。

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

のである。同時に、社会体制の諸悪は、誰かがその責めを負わねばならない。そこで、移民の革命論者と移民のギャングに関する政府の施策と新聞記事には、人々の関心が非常に集まった。外国人は労働者階級の怒り捌け口であり、且つ富の不公正な分配についてその責めを負わされる立場にあったのだ。一方、政府は革命と不道徳な富の両方に対して抗してゆく立場にあり、同時に、階級の違いは民族の違いに拡散し、お決まりのアメリカ化が出身出世の希望に取って代わった。労働者階級であるウィルソン家の怒りが上流階級本流のブキャナン家から逸れて、ギャングとの関係が取り沙汰される成り上がり者のギャツビーに向けられた後、ニックは故郷に帰り、そしてこの小説を書くことになるが、結局ギャツビーの遊園地のようなパーティーを何百万人にも読まれ全ての人に僅か数ドルで富の夢を見させる、この小説という娯楽と置き換えているのである。

小説の最後を締めくくる不幸な出来事は、1920年代の狂乱を批判し、十九世紀的節度への回帰を促している点で大恐慌の到来を予感させるものである。ニックが中西部に戻れば、そこにはヴィクトリア朝的ですらある、安定と節度に立ち戻ったというある種の感慨がある。ニックは、最終的には「永久に揺るぎなき道徳的態度」(6) に依って立つ世界に立ち戻りたいと言うのである。この結末は、通貨供給を引き締め借入を制限するという、フーバー大統領流の不況解決策を指向しているように見える。しかし、そういった読み方は、小説の結末がどれほどギャツビーの復活に心を砕いているかということを見落としている。作品は、ニックがきつい仕事に復帰したということで終わらず、大気から健康を得ることを夢見て彼が想像したように、これからニックは文学から富を築こうとしているのである。ニックはギャツビーの生涯をおおやけにし、ギャツビーから価値のあるものを抽出し、その価値から犯罪と暴発と暴力とを分離する方法を探し求めているのだ。その手法が、プロビティ・トラスト社の控え目な借り入れとクレジットと結びついて、控え目に夢を垣間見る文学となっているのである。小説は、経済危機に対するケインズ的解決法でもって終わる。低金利と赤字財政による消費の喚起だ。全ての人が、稼いだり貯えたりしたよりも、ほんの少しだけ多い目のお金が割り当てられている。万人の生活

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

は、ほんの少しだけ「おもしろく」(interesting) なり、ほんの少しだけギャツビーの生活に近づくのだ。

この小説は、ニックが東部へ行って探し求めた、大気から健康と富を引き出す方法の秘密を、ある意味で解き明かすものだ。物語は意外な新事実が続々と表面化して終わり、その大半はクレジットとは無関係のものだが、唯一の例外は、ニックがギャツビーの死後、彼の屋敷にかかってきた電話を取ることでたまたま知ってしまう債券についての最後の伝言である。ニックが耳にしたのは、『パーカーの野郎がドジを踏みやがってよ……証券業者の店頭で債券を渡したところで御用になっちまった。債券番号を記した回状が五分前に着いたばかりだったんだ。びっくり仰天よ、なあ。まさか、こんな田舎町でよう、想像もしやしねえぜ。』(174) ということである。この会話は、ギャツビーが犯罪行為に手を染めていた唯一のゆるがぬ証拠である。そしてニックがニューヨークを去ろうと正に決断しようという時点で、この電話の会話がニックの本業の債券に関連し、全国にある他の「田舎町」とニューヨークとのつながりに関することであるのは衝撃的だ。この電話は、あたかも不正な債券と神出鬼没の政府の取締り役人の危険性について、ニックに向けられたメッセージのようである。このメッセージは、ニックと債券との関わりが安全なものであるように、またギャツビーとウルフシェイムの暴発する世界に陥ることなく、「大気から」（利子から）富を得るように諭しているのである。

政府の取締り役人は、ギャツビーが出来なかったことに成功した。犯罪的行為であったこと（高利貸し）からかき集めた金を、立派で裕福な人々と親しく付き合う手段として使うのを、ある一定の個人に許可するのだ。政府による規制緩和がうまくいって、債券売買をウルフシェイムのような腐ったものではなく、デイジーのような清らかなものにしたのである。この小説が出版されてからまもなく、政府は合法的な貸金業者の積極的なパートナーとなり、大量に資金の借り入れを行い、全身全霊を傾けてアクセルでありブレーキである赤字財政という徳の道を邁進する。経済を動かし続け、「資金の回転率」を適正に保ち、過剰に「面白い」(interesting) ということであってはならないが、大いに「面白い」(interesting) 世界を維持し続け

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

ようとしたのである。1930年代までには、借入と貸付は全ての事業と政府の金融政策の規範となり、収益ないしは税金をもとに完全な所有権を持つことや完全な支払いをすることが、稀なことになった。今や誰しも、完全に支払いの済んでいる資産より抵当に入っていたり借入資本による資産の方が、経済と「所有者」を刺激するものであることがわかっているのである。欲望の対象物は、従って完全所有ではなく借入されていればより景気を刺激するものとなり、世の中は軽率に獲得し軽率に手放す、有り余る部分的充足の場となるのである。それが、財政赤字の時代における生き方なのだ。

<原註>

1) リチャード・リーハン(1990: 70-77)は、フィッツジェラルドのブローカーに対する関心を考証している。
2) 『ギャツビー』における消費者金融の果たしている役割について考察したものは殆どないが、リチャード・グッドマンは(1986)、フィッツジェラルドを初期から後期資本主義の変遷に関わりを持ったものとして特徴づけている。
3) マシュー・ブルッコリーは、私が引用で使用している版の『ギャツビー』の注釈に、この書き換えについて記している。(Fitzgerald [1929] 1992:192)
4) ジョン・ヒガム(1955: 224-28)は、1919年の赤の恐怖における移民の国外退去について詳細に記録している。

<参考文献>

Birken, Lawrence(1988). *Consuming Desire: Sexual Science and the Emergence of a Culture of Abundance, 1871-1914*. Ithaca, NY: Cornell University Press.

Dreiser, Theodore([1925] 1961). *The Financier*. New York: Dell.

Fitzgerald, F. Scott([1925] 1992). *The Great Gatsby*. Ed. Matthew J. Bruccoli. New York: Macmillan.

Gooden, Richard(1986). "Money Makes Manners Make Man Make Woman: *Tender Is the Night,* a Familiar Romance?" *Literature and History* 12.1 (Spring): 16-37.

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

Higam, John(1955). *Strangers in the Land: Patterns of American Nativism 1860-1925.* New Brunswick, NJ: Rutgers University Press.

Hobson, John([1909]1974). *The Crisis of Liberalism.* Hassocks, Sussex: Harvester.

Keynes, John Maynard(1936). *The General Theory of Unemployment, Interest and Money.* London: Macmillan.

Lehan, Richard(1990). *The Great Gatsby: The Limits of Wonder.* Boston, MA: Twayne.

Michaelman, Irving S.(1970). *Consumer Finance: A Case History in American Business.* New York: Augustus Kelly.

Olney, Martha(1991). *Buy Now Pay Later: Advertising, Credit and Consumer Durables During the 1920s.* Chapel Hill: University of North Carolina Press.

Posnock, Ross(1984). "'A New World, Material Without Being Real': Fitzgerald's Critique of Capitalism in *The Great Gatsby.*" In *Critical Essays on F. Scott Fitzgerald' s The Great Gatsby.* Ed. Scott Donaldson. Boston, MA: G.K. Hall.

Reich, Wilhelm(1961). *The Function of the Orgasm.* New York: Bantam.

Rodgers, Daniel T. (1978). *The Work Ethic in Industrial America, 1850-1920.* Chicago: University of Chicago Press.

NII-Electronic Library Service